

教職論において、賜物に性による差はあるかとの問いにかけがなれり」とがあつ、その問いかけをめぐる論議に關わるひとに挙げられる聖書箇所は少なくない。本稿において、そのよつた箇所のいわゆる一つを取り上げる⁽¹⁾。論議に入れる前に觸及しつつおくべれどあるひ思われるは、上の圖で、福音主義による教派、教団によつて、女性があどうぞわらわの拍手を受け、聖礼典の執行を許せたてこの例せらひなこひせんべなことこのじゆうだお。何十年に渡る

一 序論

稻垣 緋紗子

賜物に性による差はあるか

題 (Gender or Giftedness) やむべし

禁令を置いたのが誰で誰かを新約聖書察るべし

歴史の中ではかなりの数にも及ぶ、そのような女性の教職者たちによって、実際に職責が果たされているという事実はしっかりと受けとめられるべきものである。また、教職者として女性が任命を受けることの意義が、福音主義に立つ群においてなおりそつ確認されていくべきである。そのために、本稿がその一助となることを願う。

さて、教職論において、賜物に性による差はあるかと問われ続ける根底には、女性とつ性を持つ者が、教会において、男性という性を持つ者を含む会衆を教え、指導し、聖礼典を執行する立場を「えられるかとの問い合わせ」が含まれると見られる。その論議に関連すると思われる聖書箇所の代表的なものの一つが、創世記一章一六、一七節である。この箇所で人は神からの禁令を聞くからである。一六、一七節の禁令は単なる禁止にじまらず、許可をも含んでおり、人としてのいのちに関わる最重要の教えである。「園のどの木からでも思いのまま食べてよい」という大枠の中で、一本の木についての禁止条項が言われるのを、人は落ちついた気持ちで聞くことができたであらう。守らなければ「必ず死ぬ」との警告をしつかり心に刻んだと考えられる。そこで、その場について神の教えを聞いたのが男だけであって、そこに女は居合わせなかつたと受けとめることは、しばしば当然のこととして行われてきた。もし、最初の人として記されているのが男であったとすれば、それは、男がまず初めに造られたとすることを意味するにじまらず、かりに、男だけが存在していた時というものがあつて、その時に、男が神から直々に教えを受けたといつとも考えられることになる。したがつて、そこに教育上の秩序があつたと認める余地が残されることにもなる。しかし、この箇所に登場する最初の「人」は総称としての「人」であり、したがつて、禁令を聞いた最初の「人」が男だけであつたとは言わていないと見る立場もある。そこで、もし、神からの命令を聞いた中に男も女も含まれていたと見るなら、男と女の双方が同時に神からの教えを受けたと考えられ、どちらかが先に教えを受けたという差を認め余地は残らないことになる。

どちらの捉え方をするかは、最も基本的なところで教職論に少なからぬ影響を「」えると思われる。なぜなら、神からの命令を聞くことに関して、最初に造られた男の場合がいわば神からの直伝であるのに対し、最初に造られた女の場合が間接的であると見ることは、神からの教えを受けることにおける序列のようなものを、男と女の間に想定することにつながる可能性があるからである。

そこで、たとえば、新約聖書で、「アダムが初めに造られ」たと言われた後に、「アダムは惑わされなかつたが女は惑わされた」と続くことから、エバが禁令を神から直接にでなく、アダムを通して教えられていたために、サタンに欺かれる余地を残していたと受けとめて、パウロはエペソの女たちに「人を教える前にはまず教えを受けるよう」と命じたと解釈する立場がある。この論理が現代の教職論において実践に移される場合があるとして、実際にどのようなことが起こるかと言えば、女性はどこまで教育を受けたなら、教職者としての立場を「」られるに十分であると評価されるのかといつ、困難な問題に突き当たる。しかし、もし、一章一六、一七節で男女双方が神から直接教えを受けたと捉えるなら、この箇所が、そのような問題や困難を生じる序列の想定をする根拠にはなりえない。

禁令を聞いたのが誰であるかを考察することに、以上のよつた意義を認めることができる。そこで、その考察の鍵となるのは、禁令が与えられた際の状況の検証である。その検証は、一章一六、一七節が、置かれた文脈に従つて釈義されることを通してなされるはずである。本稿では創世記一章四一五節を、ヘブル語、*εὐλόγιον* の用法、及びヘブル語動詞を中心とする段落構成について視点から検証し、禁令が記述される一六、一七節がどのよつて位置づけられるかを見るにとどめる。

II 創造の記述における「人」とこの語の用法

総称としての「人」の創造

「アル語 'ādām が「人」をやつて使われる際 'ādām が文法上は男性であつても、指示対象は男女共通 (common) である場合がある。'ādām が由て「れば」それが男女共通の「人の総称としての「人」をさすか、それとも男をやつしてこのかを文脈に照らして異極めなければならぬ。」¹⁾ たゞれば、創世記 1 章 18 節で「人が造つていいるのは良くな。向きてて援ける者を造りし」と書かれたとある。この 'ādām 「人」は、だれをやつてこのかであるか。人の総称としての「人」 (human being) であるのか、男性であるのか、女性である人 (man) であるのか。」²⁾ は総称としての「人」であるのか、男であるのかと、問つ必要のない表現として使われてゐる可能性が大きい。しかし、「独りでいるのは良くな」と記述される段階で男・女の区別にも触れてゐる。つまりに女が造られていないかった時点にこのものがついて、そのときの「人」は既にあると想えるかと問つ余地を残してしまひ。そのような問ひが生じるのは理に任はない」とある。したがつて、18 節での記述は、男・女の別そのものを並べて段階にはなこと見て、18 節の 'ādām は、総称としての「人」をやつしてこのと捉へるべきである。

翻つて、創世記 1 章 16、17 節の場合では、'ādām は「人」つまり男女共通の「人」、ある「は総称としての「人」をやつして」が明らかである。17 節では男・女の区別にも触れており、男も女も神のかたちに造られたと書いてある。「人」を「男と女とい」造つたと書く、その「人」を「彼ら」 (複数) と書いてある。つまり、「人」を男女両性具有に造つたのではなく、男とし、女とし、あるいは男女と造つたのである。男を造る「人」をやつすべきで、後になつて

女を造る「人」を思ひ立つたと云ふのではない。人を初めから男と女と造つたのである。

この創世記 1 章 16、17 節の記述を受け、創世記 1 章で「人 (総称)」の創造が再び取り上げられる。その後は、やさに触れた一八節まで続けて「人」と見られる。したがつて、禁令の語られる 1 章 16、17 節は、総称としての「人」の創造の記述の段階に置かれて「人」と見られる。その「人」に向けて語られたものである「人」を示唆してある。つまり、禁令を男も女も聞いていたと見る「人」が可能である。

男・女としての「人」の創造 (向きてて援ける者の創造)

そして、男・女としての場合、男が造られ、女が造られて初めて、男は男であった、女は女であったことが言える。やつしたときに初めて対として「人」とが言える。そのよつた意味で「男・女としての「人」の創造が取り上げられて、詳しく述べられるのは一八～110 節においてである。110 節を覗く、「110 節の「アダムにせ、向きてて援ける者をやつた」 (傍説の箇所は筆者の語り)」と云ふ次の 'ādām は「人」との記述がついていない。つまり、110 節の 'ādām から²⁾ 固有の語である 'ādām についての記述が始まるが可能である。創世記 1 章の人間の創造に関する記述は、110 節で視点が新しくなると段階的にかたむく。男性であるアダムについての語及くの移行は、「110 節からやつて見ゆ」と云うべきである。

では、「アダムにせ、向きてて援ける者はやつた」 (傍説)、「110 節が置かれてこのように、」³⁾ ような意義があるやうに思われる。一九、110 節、「アダムにせ、」⁴⁾ 110 節で「ēzer kenegedō 向きてて援ける者」⁵⁾ と云ふ概念の説明として置かれてこのように書かれてある。「援けの神」 'ēzer は亞述語で「神」、'ēzer はアラビア語の「助け」の語やアラビア語の「神」であるアダムについての語及くの移行

三 段落の連鎖を見るへ「川語動詞」の用法

セリヒドリヒテ、一八節の冒頭にあるヘル語の *wa* をひのよひに理解するかが問われる。*wa* を、「その後」を指す接続詞と見て、「その後」神が、「人がひとりでこののは良くな」と言つたとこりよひに捉へると、一六、一七節で総称としての「人」に禁令が語られたことを受けた後に、つまり、男も女も禁令を聞いた「その後」に、向き合つて援ける者の創造がなされたと続くことになり、事の前後関係を正しく受けとめることができない。しかし、実際には、一八節冒頭の *wa* は、語りの進展を担つべフル語動詞に組み込まれた *wa* として捉へられるべきものである。セリヒド

談話の段階での段落の構成単位

本稿三章ではヘブル語動詞による段落の連鎖構造を見、続く四章で段落の積み重ねによる記述の進展ぶりを捉えることとする。それによつて、禁令が語られる段落の位置づけを検証する。すなわち、語りの進展を支えるヘブル語動詞の形という視座からの位置づけである。

提示されている。）

が *wayYIQTOL* で語られる⁽¹¹⁾。あなたが「*ijahfta*」*ijahfta* とこの *wayYIQTOL* 連続、また、あの場所にせ、「*ijahfta*」*ijahfta* 単独の *wayYIQTOL* が「*ijahfta*」*ijahfta* を構成する。一八節の圖體せんのよひな *ijahfta* の始まりとならない。したがって一八節を、「*ijahfta*」*ijahfta*。神である主は。『人がひとりでいる』捉えるのでせば、「*ijahfta*」*ijahfta*。神である主は。『人がひとりでいる』……』のよひに捉えるのが、圖體の *wa* の用法を踏まえた捉え方である。圖體の *wa* は「*ijahfta*」*ijahfta* のよひに捉えるのが、圖體の *wa* である。

段落の内部構造から段落連鎖の構造へ

やいと次に、一章四～一五節の全体がどのよひな段落連鎖を示しているかを明かにしてこくための前段階として、段落の内部構造と段落連鎖の構造との関連に注目した。その例を、創世記一章との関わりを論議する際にしぱしづ取り上げられる、一章一八、一九節の記述に見るとわかる。一九節で「神である主が……野の獣と……*ijahfta* 鳥を形造つて……人のよひに連れて来られた」と記される。そのよひに創世記一章での出来事の時間的順序との間に「*ijahfta*」が存在すると見られることがある。この「*ijahfta*」を解決するため、「おひゆる野の獣とあるよひの鳥を形造つて」という表現のよひに大過去（pluperfect）を語める立場もある。すばり形造つてたのだが、それを連れて来たと解釈するのである。しかし、一章一九節はむしろ創世記一章の記述を前提として書かれてこると見るべきである。創世記一章から一章八節、遠近法的な展開（視野の変換としてのクローズアップ）⁽¹²⁾をして語られる人間の創造については、ある意味で「順序が違う」（あることは「順序が違う」とこなす）とこひよひ全体が、著者の意識にならぬかもしない。しかし、たゞ著者よひのよひな意識がなこひよひや、一章一八、一九節の記述が創世記一章八節

章の記述を前提としたものである」とは⁽¹³⁾、段落の内部構造と段落を越える構造との関わりが明らかにせられる。段落の内部構造と段落を越える構造との関わりが明らかにせられる。段落の内部構造と段落を越える構造と段落の構造を反映した、語り特有の構造が見られるからである。

一八節（*ijahfta* によって成りたつ段落である。本稿巻末の「キリスト」を参照）では、神である主が、*wayyō'mer* 「*ijahfta*」*ijahfta* 一九節（*ijahfta* によって成りたつ。本稿巻末の「キリスト」を参照）では、神である主が、*wayyis̄er*... *wayyābē* 「形造つて……連れて来た」とこひ、*wayYIQTOL* 連続が見られる。「形造つて……連れて来た」とこひの事実が、「形造つて……連れて来た」とこひの順序でひととおりされ、「連れて来た」とこひ」とが起じる前に、「形造つた」とこひ」とが起つたと確認しつつ、力点は「連れて来た」のよひに置かれる。つまり、語りの流れは、「*ijahfta*」（一八節）、それで「連れて来た」（一九節）である。「Aして……Bした」「形造つて……連れて来た」とこひの連続のうち、力点は B（「連れて来た」）に置かれて語りが進展するのである。いひつて見ると、記述の進展を捉える視点は、段落と段落との関係だけでなく、段落の内部構造を把握する際の鍵ともなる」とが理解される。

出来事の時間的な順序と記述の流れ

一方、出来事の時間的な流れは次のようである。「*ijahfta*」（一八節）とあるわりと前に、動物を「形造つた」（一九節）。つまり、「形造つた」「*ijahfta*」「連れて来た」が、出来事の順である。以下の図一、図二で、垂直方向は記述の流れを示し、水平方向は出来事の時間的順序を示す。図一は一九節と一八節の構造を、図二は一八節一九節と一九節連鎖の構造を提示したものである。

図 I (ニ | ラ テア 4 = 一九節)

記述の流れ

wayyiser 「形造った」 (一九節)

wayyābē 「連れて来た」 (一九節)

時 の 流 れ

図 I (ニ | ラ テア 3 ニ | ラ テア 4 = 一八節 一九節)

記述の流れ

wayyiser 「形造った」 (一九節)

wayyābē 「連れて来た」 (一九節)

時 の 流 れ

wayyiser 「形造った」 (一八節)

wayyābē 「連れて来た」 (一九節)

ニ | ラ テア 4 (図 I) だけを視野に入れるのであれば、出来事の時間的順序は「形造って」「連れて来た」であり、記述の流れもその順である。しかし、ニ | ラ テア 3 ニ | ラ テア 4 (図 I) との連鎖では、記述の流れからすれば「仰せられた」が先であつて、時の流れでは「形造って」が先行してこそ。記述の流れと時の流れで順が異なるの

である。つまり、「語り手は」「仰せられた」とある A3 (一八節) を受け、A4 (一九節) の「連れて来た」を語り、「ハレコト」、「仰せられた」や「わ皆聞ゆせ聞ゆ超ひた」「形造って」から語りだしてこぬのである⁽¹⁴⁾。

設落の起^ヒ止^ヒおけぬ皿田な語つだ

くアラ語でセニラ メがあらたまぬるヒリ、一連の wayyiqtol によつて、その都度新たに、「ハレコト…ハレコト…ハレコト」あぬこは「ハレコト」、「ハレコト…ハレコト…ハレコト」などと語つ直すことが可能である。ニ | ラ テア 4 (一九節) も直前のニ | ラ テア 3 (一八節) に接続して出来事の時間的な順序たつこては皿田に語りだしてこそ。時の流れが、記述の流れの中ではなくそのような形で表される」とは、皿語における時制とこのようには区別して検討され、捉えられる」とある。その検証皿体が、言わば時制との概念を、語りとこの談話 (discourse) の段階での事柄として捉えることである⁽¹⁵⁾。如ニ | ラ テア wayyiqtol 連続の起^ヒ止^ヒを、その時点の事柄に置く」とも可能である。もしかば、こゝたん語つだしたニ | ラ テアの wayyiqtol 連続に限つてみれば、そこでは文^{タキ}通りの時間的、論理的順序に従つて記述される。しかしこニ | ラ テアの間となると、その連鎖の関係は必ずしも一様ではない。通常は時間的な順に従つてこゝたん語つだして、基本的には詳述の度を増してこゝへ進展であると思ふ」とがである。

四 詳述への移行と展開

では、創世記 1 章 4 ～ 5 節を構成する箇段落は、どのよひな記述の積み重ねをしてこぬだあひつか。後半の一八

～「五節における、男・女との「人」の創造（向むかひに援けむ者の創造）の説述の積み重ねにこじせす」に触れた。ナリに本章では、ハクヒ、四～一七節の、総称として人の創造の記述の部分を中心として、如既述におけむ記述の進展を検証す。エト、段落の単位である如ヨーハニシアをA1、A2、……、B1、B2、……などと名づく。それによつて、一章四～一五節全体がどのよつた構成を示すものであるかが明らかにわかる。

出来事への先行部分、また、問題提起としての四～六節

津村氏が指摘するように、本章では、「地」と「人」の箇所で、開墾の対象となるなに、「sāde」、「地」と「耕作の対象となるなに」、「aqāmā」、「土地」にひいて、その状況が語りられる。sāde せ、神が雨を降らせなかつたために、「不毛で、植物が見られない」。一方、「aqāmā」の意味は、「地から水が湧あだつてはこるが、「土地を耕す人がいな」」。その一端が、以後の記述に回わた問題状況として提起せられてこむ。¹⁶⁾

人を造り、園に置く

舞虹の移行 = 四～六節 七節 八節

出来事への先行部分では、「地」と「人」の箇所で、「地」と「土地」にひいて、それがわれの問題が語りあつたが、その後、「説述のボイントは、「地」ではなく、「土地」に絞らね。つまづ、創造の舞虹せ、「eres」、「地」（四～五節）、「aqāmā」、「土地」（五～七節）、「ēden」、「Hīm」（八節）gan「園」（八節）くと移行してこべ。G・カベトワーヘセ、eres せ、せぬから視度かじりがでれる地の全面であつ、「aqāmā」は人の範囲にわたつた地（sāde がじれにお立あら）であると見る。¹⁷⁾ 一方、「ēden」は、水の豊かな所であつ、その、水の豊かな所からganを造るのが、人のために園を造るところである。

「設け……置いた」

七節（A1）から八節（A2）への展開

八節（B1）では、時間的、論理的な一續せひつて、wayyīta'……wayyāšem「設け」、「置かれた」、ひづつてこね。直前の七節（A1）の、「人を形造り……息を吹き込まれた」とこひ、時間的、論理的な一續きを前提とし、それに積み重ねる形で、「園を設け……人を置かれた」と、いわば自由に語り直してこる。したがつて、神が園を人の住める状態に整えた後に、人を園に置いたと見るべきである。園が造られるまで、人が宙に浮く形で存在していたと示唆されてこむのではなく、これは明白かである。著者が、園と人の関係を語る新しくヨーハニシア、「園を設け」と語りだすとき、その視点は新しくなつてこむ。その新しく視点で、「設け……置かれた」と時間的流れに従つて語つてこる。

土地と人との密接な関係

八節（B1）から九節（B2）への展開

八節と同様のこととは次の九節（B2）の場面にも語られ。ヨリから園の木の記述に入るが、八節で園はすでに園としての条件を満たし、木は生えていたばかりである。だが、視点をあらためたうえで、新しく「木を生えさせた」から語りだしてこむ。しかも、八節が、先行の七節との間に、視点を改めても密接な関係を示すよひに、九節もまた、先行の八節と密接な関係をもつて続いてこむと見られる。主なる神は、「見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を」、園の外の、「aqāmā」でせな、園の中の、「aqāmā」から生えさせた。ēden に gan を造つて人を置いた「その土地」から、つまづ、gan の中の土地から生えさせた。すなわち、人間が置かれる環境の中で生えるようにしたといふことである。

耕し守る者として置いた　八、九節 (B1、B2) から一五～一七節 (B3、B4) へ B3 (一五節) の「人を取り、園に置き……」を、B1 (八節) の「園を設け……人を置いた」の同義的表現と見て、それをもつて川に関する記述 (一〇～一四節) といへ、いわば脱線の部分の終了と捉える立場がある。しかし K・A・キッチングによつて、五～一七節全体に統一性を認める立場もある。キッチングは、五～七節、八節、九～一四節、一五～一七節が、一貫して、人の置かれた舞台である園と、そこでの人の役割と仕事をと、詳しさを増しつつ語り進めている (specify with increasing detail) と見る⁽¹⁸⁾。いずれにせよ、この箇所に、いわゆる創造神話の語り (四～七節、九a節、一五節、一八～一四節) と、楽園神話の語り (八節、九b節、一六、一七節) の混在を想定することはしないのである。八節で、七節を想起する形で、「形造った人を」と言っていたが、そこでは、何をするためとまでは言われていない。一五節になつて初めて、耕し、守るためと言われる。つまり、一五節は八節の単純な繰り返しではない。「人を置き」までは八節と同じであるが、そこから先は意図的に違つことばを用いて、さらに詳しく語り進めている。

「川」　九節と一五節との間に登場した新しい主題

一〇～一四節で、川といつ新しい主題 (topic) が導入された。それは、九a節に対しても、図IIIに示されるよつて、二段構えになつた随伴部分の中にある⁽¹⁹⁾。

図III

(園の記述)	九a節	すべての木をはえさせた
(木の記述)	九b節	一本の木
(川の記述)	一〇～一四節	川

人間にとっての距離といつて、川は木よりも一段と背景 (background) に退く。人間はいのちの水を飲むことによつてでなく、善悪の知識の木の実を食べないと、生きて生きる者である。しかし、川に関する記述もまた大切な背景である。創世記の記述が作り話ではなく、ある地理的状況を想定しつらるものであることを示唆するものとなつていふ。

川の記述をはさんで進展する詳述

川の記述の前にある、八節 (B1)　九a節 (B2) の連鎖と、川の記述の後にあら、一五節 (B3)　一六、一七節 (B4) の連鎖との間には類似が認められる。B1では、神が園を設け、そこに入を置いた」とが語られ、続くB2の最初の九a節で、「食べるのに良いすべての木」及び園の中央の一本の木について語られる。一〇～一四節に及ぶ川の記述 (背景的記述) をはさんだ後、今度はB3で、神が人を園に置き、耕させらせたことが語られ、続くB4で、どの木からでも食べてよし」とある一本の木からは食べてはならないことなどが語られる。つまり、どちらの連鎖にも共通して見られることが、図IVで示すよつて、神が園に人を置いたことへの言及の次には、木に關

ある記述が来る」とある。

図四

- B 1 神である主が園を設け、そこに人を置いた。（神が造った人と、園との関係）
B 2 「食べるのに良いすべての木」（木に関する記述）
園の中央の一本の木について。（木に関する記述）
〔川に関する記述=背景的記述〕

- B 3 神である主が人を園に置き、耕させ、守らせた。（神が造った人と、園との関係）
B 4 どの木からでも食べてよい。（木に関する記述）
善惡の知識の木からは食べてはならない。（木に関する記述）

また、B 1に対し、B 3では、神が人を園に置いた目的が語られるという点での進展があるよう、B 2に対し、B 4では、善惡の知識の木（園の中央の一本の木のうちの片方）に関する禁令が語られるという点での進展が見られる。

随伴部の後で新しくなる視野

B 2とB 3の間に挟み込まれる川の記述を、A・ニッカーツイはB 3（一五節）への先行部と見る⁽²⁰⁾。それに対し

て、F・E・アンダーセンのように、川の記述を、B 2での随伴と見る立場がある⁽²¹⁾。B 1、B 2においては、川に関する記述に至るまでの間に、八節では人と園の関係へ、九節では園の土地から生えた木へ、さらに、一〇節では木よりも一段と背景的な川へと、視点がなだらかに移行している。したがって、川に関する記述は、B 3、B 4への先行と見るよりも、B 1、B 2への随伴と見るほうが落ちつきがよいと考えられる。

詳述への進展に見られる入れ子構造

人と園との関係の記述（ハ）一七節＝B 1～B 4）が、総称としての「人」の創造の記述（一章四～七節＝A 1、A 2）に、落ちつきよく随伴することは、創造の舞台の移行についての説明の項で触れたとおりである。随伴部の後で、視野は大きく絞り込まれて、男・女としての「人」の創造（一ハ）一五節＝A 3～A 9）が詳述される。そこで、四～一五節全体を見渡せば、図五に示すように、詳述への進展での二重構造を認めることができる。まず、総称としての「人」の創造の記述（A）に、人と園との関係についての記述（B、B')が随伴し、その後に、男・女としての「人」の創造・向き合って援ける者の創造の詳述（A')が続く。そこには、（A）（B、B')（A')という交差構造が見られる。また、（B、B')のうちの（B）には、川に関する記述（C）が随伴するため、（B、B')もまた（B）（C）（B')という交差構造になっている。つまり、B C B' という記述の進展が、A B C B' A' という記述の進展の中で入れ子になっている。したがって、A B C B' A' には、A B C B' A' という交差構造が認められる。

図五

- A 総称としての「人」の創造の記述（A1、A2）
- B 人と園との関係についての記述（B1、B2）
- C 川に関する記述（Bへの随伴）
- B' 人と園との関係についての記述 新視点より（B3、B4）
- A' 男・女としての「人」の創造 向き合って援ける者の創造 の詳述 新視点より（A3～A9）

五 結び

以上の検証から明らかなことは、神が人に与えた禁令についての記述（創世記第一章一六、一七節）が、総称としての「人」の創造の記述に付随する箇所に現れることがある。また、総称としての「人」の創造の記述の後に来る、男・女としての「人」の創造の記述が、出来事の時間的順に従つてであるよりは、詳述への進展として現れることが多い。つまり、禁令が語られた後に、男・女としての「人」の創造があったということには捉えられないものである。禁令は総称としての「人」に語られ、したがつて、その場には男も女もいたということが示唆される。つまり、神が禁令を語つたときにそれを聞いたのは誰であったかと問われるなら、それに対する答えは、「男も女も禁令を聞いた」である。そして、一章一六、一七節において、神との交わりの本質に關わる教えを、神から与えられた立場にいたの

が男であり、また、女であつたと捉えることができるのであるから、一章一六、一七節が、神から教えを受けたといつては、総称としての「人」の創造を示唆する箇所ではありえないといつては、総称としての「人」の創造の記述の後に来る、男・女としての「人」の創造の記述が、出来事の時間的順に従つてであるよりは、詳述への進展として現れることが多い。つまり、禁令が語られた後に、男・女としての「人」の創造があったということには捉えられないものである。禁令は総称としての「人」に語られ、したがつて、その場には男も女もいたということが示唆される。つまり、神が禁令を語つたときにそれを聞いたのは誰であったかと問われるなら、それに対する答えは、「男も女も禁令を聞いた」である。そして、一章一六、一七節において、神との交わりの本質に關わる教えを、神から与えられた立場にいたの

テキスト

傍線を付した語は括弧内の「waYYIQTOL」の日本語訳である。ヘブル語テキストで「waYYIQTOL」は各行の行頭に来てくる。

（総称としての「人」の創造を記述）

- 4a これは、天と地が創造されたときの経緯である。
- 4b 神である主が地と天を造られたとき、
- 5a 地には、まだ一本の野の灌木もなく、
- 5b まだ一本の野の草も芽を出していくなかつた。

5c それせば、神シムのシムが地上に園を築いたからだね。

5d 土地を耕す人は、いはかった。

6a ただ、水が地からの湧き出る。

6b 土地の全面を潤していった。

A 1

7 神シムのシムは、土地のわたり人を造り、(wayyîser)

ルの鼻ノシにこののの息を吹き込めた。(wayyipah)

A 2 (神の行為の結果)

人生をもたらす人ヒト (wayehîn)

(神が造った人ヒト、園の監造)

B 1

8 神シムのシムは、果の木ミツバ、ハーブ園を設立、(wayyîta)

ル (神シムのシム) 形造った人を置かれた。(wayyâsem)

(園の記述)

B 2

9a 神シムのシムは、ルの土地から、咲く花は全て食べぐれの立派な木を

生スルやわら (wayyâmal)

(木の記述)

9b ここの木、鬱鬱の茂盛の木が園の中央にあつた。

(三の記述)

10 一つの三が、ルの園を潤すため、ハーブから田地へ、ルにかかる流れで、四つの源となりていた。

11 第一の水の流れは、ハーブ、それはハーブの金土を流れて流れ、ルにせ金土があつた。

12 ルの地の金土、良質で、また、ルにせハーブの土をもつてゐる。

13 第二の水の流れは、ハーブ、ハーブの金土を流れて流れ。

14 第三の水の流れは、ハーブ、ハーブの土を流れて流れ。

第四の水の流れは、ハーブの東を流れ。

B 3

15 神シムのシムは、人を取り、(wayyikah)

ルへの園の監造、ルにせ森をわか、ルにせ川をわか (wayyannîhêhû)

- 21 神である王は、深く眠つて人間に見つからなかった。 (wayyapēl)
 (人間) 眠つた。 (wayyīšān)
 (神である王は) 彼のねぶな睡のうねに見つからなかった。 (wayyikah)
そののじいの寝ねわがれだ。 (wayyisgōl)
- 22 神である王は、人間の眠つたあせの寝ね、わがの女に見つからなかった。 (wayyibēn)
 彼女を人のねぶなに連れられて来られた。 (waephēlah)
- 23 人は眠つた。 (wayyō'mer)
 「これいの今や、私の寝かの寝の寝。私の肉かのの寝。 じだを女じめでさよな。 じだせ男から取られたのだか。」
- 24 やれやれ、眠せんの父母を離れ、妻と娘が泣く。 ふたつは一本つなのである。

アタムヒサ、回れいくつに寝たる神は見つかなかつた。

- 16 神である王は、人間に見つからなかった。 (wayēšaw) 「あなたが、園のやの木からやがてのまお食べじよ。」
- 17 しかし、神の知識の木から取つて食べてはならぬ。それを取つて食べるとの話、あなたは必ず死ぬ。」
- (男・女ヒントの「人」の體想、回れいくつに寝たる神の體想、神話)
- A 3 | B 4 |
- 18 神である王は、見ゆれだ。 (wayyō'mer)
 「人が、かしこのせ眠くな。わたしは彼／彼女に、彼／彼女に向かひて援けの神を連れい。」
- A 4 |
- 19 神である王は、十から十五の獣の獣を形調ひて。 (wayyiser)
 それにはいとな知を(人か)うけかを覗いたる、人のやうに連れて来られた。 (wayyābē)
 人が生き物につけぬかせ、みな、それがその知ひなつた。
- A 5 | (人の応答)
- 20 人は、すべての獣、山の獣、野の獣のあいの獣に見ゆれだ。 (wayyikrā)
- A 6 |
- A 7 |
- A 8 | (人の応答)
- 91 90

注

